三國一夜物語

ヘ 13
3021
4

へ 13
3021
巻 4

富士浅間三國一夜物語巻之四

東都　曲亭主人著編

第五編

富士太郎森羅殿の舞正月召るく支

富士太郎ハその夜より彼の奴隷を招くに合法が術を考へ出ぬるとて。

遂に時を移して三ヶ月の間人照行ハそのかとりにもあらず閻魔堂も焼泉

て焦熱地獄も眼前ありて猛火の中に一堆の灰を排除て父が

死骸を素れ出ずバ肝ハ裂く血と灰ハ塗れ五體あやまり焼くるを

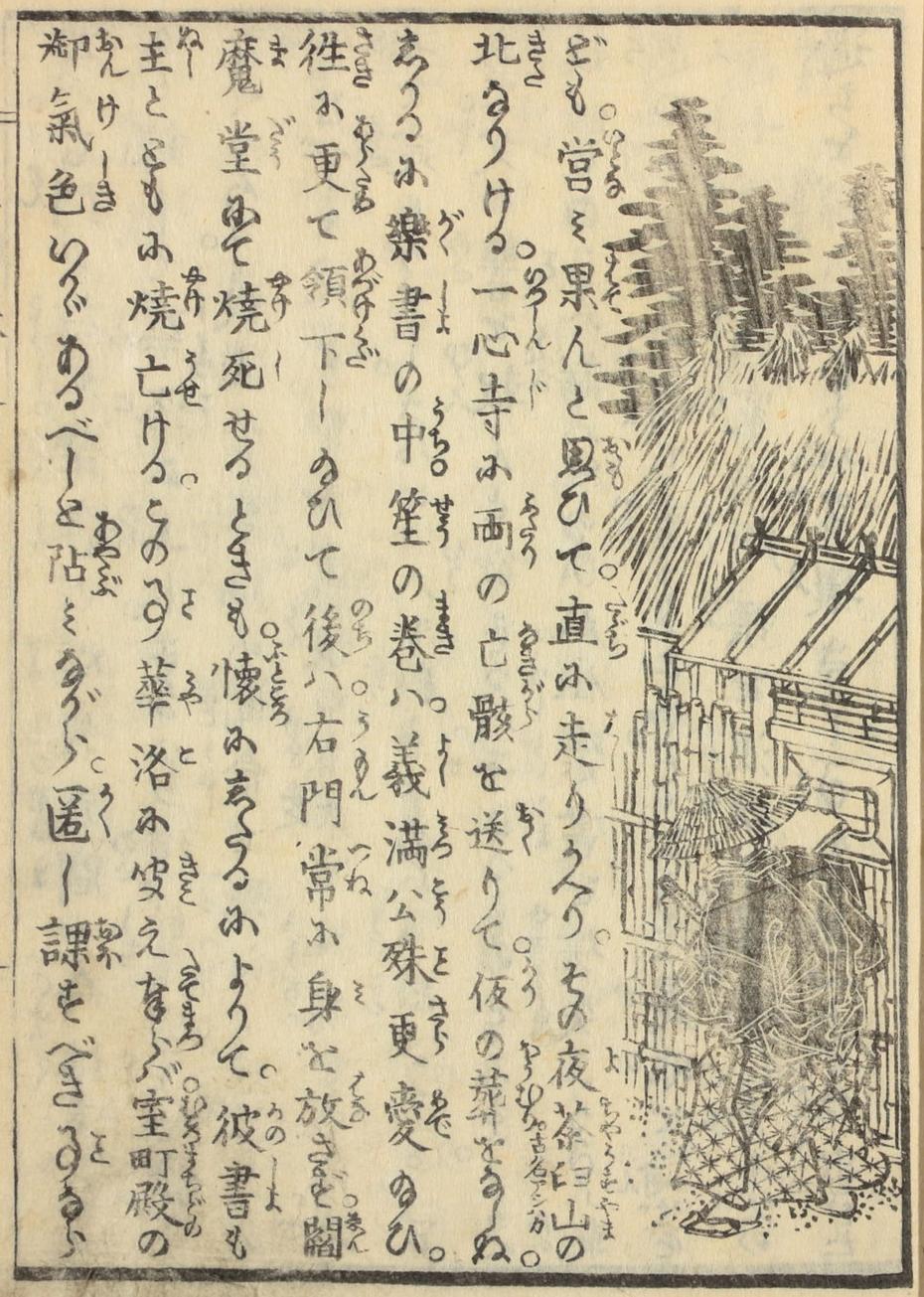
見て流涙堂を袖を濡らし悲しく悶然として

ありけるが程なく志を勵し奴隷とせんと是を卑て黒法を立うんとバ。

村主兵助も又後間に撃五毎の三雲も危うしを猴子が大鼓を打く

昭和九年七月一日　購求
楚中

彼此人を會合しうば、照行おまを害怕て忽地逃去つるゝと雖て、
憤ることまを、家に在るうば兵衆をば撃せまゝ、あつのこゝろ
照行おまを奉りを立地を撃とゆゑ、走らせつるまを枯
惜けまと嗟跎して悔恨ば毋も擾子もいと理と思へもめうらるれ
遷しまをひとの変ちたくる面影を今般の苦痛堆量拉方後方を立
そひて焼野の雉のあるくと落る涙の露のまもを消んと泣
まどふ實や無常の風を靡く富士の煙つるひるくも讐人の往方
向ばやと富士太郎ば夜明て後天王寺のやうに到るくひそうふ窺ば。
照行ばその夜う逐電し老母卯原のこゝに有と聞えしうば。
てば速を仇を報ふ喜もるしぐさ。まづ父と村主ゲ後のる



ぞも宮を果んと思ひて直ゆ走りうう。その夜茶臼山の
北なりける。一心寺ゆ両の亡骸を送りて仮の葬をるね
あるゆ樂書の中笙の巻ば義満公殊更愛ゆひ。
往ゆ更て領下しゆひて後ば右門常ゆ身を放さを闇
魔堂ゆて焼死せるときも懐ゆ入るゆよりて。彼書も
主とともゆ焼亡ける。このゆ萃洛ゆ突えまうば室町殿の
御氣色いるぶあるべしと阽をるうう。匿しを課をべきるう

ねば。右門が枉死。樂書の焼失浅間が為体まで。おのおの録して華洛に上し。まるいち復讐のうを願ひたてまつる。義満公委細に聞食て照行が残忍ふかく憎むべしと。のまぐ遺恨の本末を糺明せざまば。是非を定めがたし。さハの。人を殺とものハ又殺さるゝが法にて。父の讐を報んと欲まるハ子たるものゝ本分なり。彼讐のゆへを諾ハせぬ。但樂書を焼失さるゝハ軽忽の至り。その過ち重くるぞやとをもて是非を論ぜ。富士浅間両家の所領を没収し畢り。後日に八父の過ちを補ふ功あらバ。召環さるゝもあるべしと命出さ

ける。富士太郎畏て墨江の宅地を引退き奴隷にハ。ゆ〻ゝ鼠の暇をとらせて。五六町巽なる浅澤の片辺ふ。古くなる草舎をもとめて。親子三人うつり住ミ。村主がゝ〻ふ佛支追善を営むから。更に他ゆゝしくふ亦浅間が母の卯原へつぐ児照行が。富士右門主従を斬害して。いづちともなく逃去りぬ。老たる狗の家を喪る心持なり。阿部野に幽き住家をもとめて為ともなく日をおくりしが。元より雄〻しき老女なれば敢て愁の色をも顕さず。一日富士太郎が家に訪来てのたまハ。さても富士浅間ハ正しき一家の親あり。遠祖の確

卯原萩の
花餅を
貰ひて
富士太郎
久家へ到る

執り。胡越の男ひをうーとるゐ右門ぬー不意畿跡て。
の津國ゐ立入うまひねきバ。外のとゝくハおもかゞぎいと欲
びてけりしゐ照行年弱けきバ。ときやゝ娼おりひけん親
くも交らぎ却て白き眼りて。見まるらまるゐ痛くて。
母ハちだく諫しゐ彼用ひざるのまるぐ。終ゐ浅きき
所為をまるね。吾身も仇の親るきバ。さとそ憎しとおぎえぶ。
今昔のようしを思ふ。悪人の親るりとも必ず悪人るる
べきゐもあらぎ。うれとそーも生着ねど。是まる前世よりの
悪業るきバりゐともせんきべるー。吾身の憂ゐくらぶ
きバ。痛まくも又面るくて。壽きハ恥おかき世ゐ立るも

あらぬ身の思ふなどとも突え進らせ潔く自害せばやとそ。
推て参りけりつとゐ訖り。豫て用意やきろうけん懐剣
より出して。きらつと引抜既ゐ呪ゐ衛さてんときるを三雲
櫻子楚とその手をより止きバ。富士大郎聽て剣を挑
さるちそりゐ。照行とそ與ゐ天を戴さるの讐人ゐれ我
身ゐハ聊も恐ゐし。ちるをとゐて自殺あらば。好意
却て悪意とる。剣を逆ゐして人を抱ゐひとるへ。
身の心の清きとゝハ。ようーきまゝて伏。生害のりハ
曲て男ひとぎまりるゝーと理を竭して諫きバ三雲も櫻
子も又さるぐゐいひとーらゝ。やゝ送り出せーゝ。

卯原ハ死も死まじとうち泣て阿部野ゐ帰りしが。こゝ
ろもとなく訪音づれて。憂をなぐさ慰るを富士太郎欲
この三年四年以来彼卯原同じ浪速ゐ住ぶ。絶て
一ゝびも訪来つるもなりしゐ既ゐ千鈎の仇とありて。
却て親を相語んとまるゝ。恥辱をたゝざるゐ似ゝ。是
併国ゝる獣ゐ獲夫ゐ狎る類ひなるべけまど。勝母の
名を憎て車を返しゝる例もあまべうるぞしも此後ハ
卯原が来てもいさゝかとあるなど詫て。いつも門ゝぞ
返しけり。かくて春も徒ゐ暮て。四月のたゝゐはなりぬまど。
心慰むよまもなく夏山の緑なを眺てハ。讐人の往

方をおもひ。杜鵑の声を聞て亡父のおしゝをたゝ
ゝ。待ゝ入なゐ七七の忌日も翌とゝ。その日ゐもなゝ
ゝ。追悼作善ハとゝさゝ。逮夜ゐありとゝバとて。富
士太郎ハ未下刻櫻子を将て。一心寺ゐ詣んとまる
折しも。卯原食籠ゐ萩の花とゝ餅を盛つゝゞ
ゝ饋来てゝ。その餅ハ婆くが手きさびゐ搗る
ものなゝゞ。味ひつきて美ゝざまどもなゝゞ。今
日ハ十七の逮夜ゐもあゝゝゝ。露ゝりの志ゐ
ける。仏へ供てゝ。帛紗をゝり出も
ゝ。蓋の間ゝり餅一ッ転び落けゝゞ。ゝ悔ちゝ

いひ、とりて後方を見るに庭に痩せる犬の甸
甸とるに投與ふまじ。犬は只一口にうち食てうゑ欲げに
尾をふりぬ。三雲は櫻子に命て。餅を器にうつし取せ。
此志のかど浅からぬなど回答をれば。卯原も去ぬ。
四表八表のものがたりし。近きふまと訪ひ進らをべー。と
怨に堪え置て帰りけり。富士太郎その後影を孰
目送りて。世の人嗚呼なる者もあるかな。父は彼が子に
撃まとるひまぶ。今にもあまと照行に出會ば。こまと照
行を撃。照行こまを返殺にまるる。勝負は時運に
よるべけまど。いかで双に鮮で共已べき。あるを卯原屢

志を運び。信を示して寛んとすれども老母とりとも其心
甚汚し。渇しても盗泉を飲ずとそ哭け。寃家の饋を
受て孰ろその父を祭るものあらんやとあざけ笑ひ。きき
人に隙費して。墓にあるに後まろ。いざゆくべーといひて。
櫻子をいそがし引。母に辞しつるまして家をさりぬ。その嘘
昏に一心寺にのぼりて。父が墓にまうで。夫婦哀悼の涙を
注ぎぬ。又兵助が墓にも手向して。住吉街道を帰る。
只見まば。前面に金殿玉堂。嵯峨として夕月影に輝
いとうり。寺麗壮観。彷彿王城に異ならぬ。まとば。富士太郎
夫婦ふりかへりて。日来とて行ひぬまど。殿

造りのあるいはいまだ見も聞も及ぶ奇しきことさ
まきあひてかとり近く来るとき。忽地四足門の裡より一個の
官人走り出て。富士太郎ホを呼びとゞめ。今日森羅殿
成就して大王内宴しの人ハ。樂人障ることをゆるして大
皷の役を闕のハ太うるハ汝とへ来つることを幸ふ。とゝま
ち御内の舞樂ハ召加へよとの宣旨あり。らく〳〵ゆ
へとい。富士太郎聞て。まづ人を入るハ冠装束延
喜以前の朝服ハ似てその人唐人めきしゑ。
疑ひまどひ。固辞バ罪せらるべしと畏こゝ夫婦儐
きて裡ハ入り。同じ門三ツ有りて宮闕ハ

到きバ正面ハ螺鈿金字の額を打て森羅殿の三
字を写し。左右又聯あり。梵字ハして讀解ず。
その殿中の廣ふ。數千人を容るべく柱桷桁天井
鴨柄長押ども。みな香木をもて造作しゝ。馥郁として
旃檀の林ハ入るごとく。狻猊旃兒瑞鳥。梧桐緑竹。牡
丹のごとく或ハ画き或ハ彫て。金壁璫を飾り。錦障帳を
垂。銀燭晃星のごとく輝て南面の高御座ハ翠簾を
うけらきしゝ大王の玉座ハ。べく〳〵ゑ。出御ハ
あらぎ。諸司六曹の判官齊〳〵整〳〵として両邊ハ侍立
樂人ハ廊のうへハ候せり。とゝの時以前の官人いと愛

富士夫婦
不意ハ
森羅殿の
前を過る

たき裝束をして来て富士太郎に被させ引て樂人の中に候ぜしめ櫻子をば孫廟の此方に居しむ且くして警蹕の声とともに大王屏風の後より繞出のをを見ば面は大棗の如く赤く眼は蛇の如く方に鼻は獅子のごとく圓に髯は虎の如く尖にして相貌頗兇悪之身は蟒衣を穿腰に玉帶を束手に玉簡をとり昂然として高御座に升のぼば諸司百官禮義を正し参拜已に畢る折しも有司奏して新裳意まゝのひぬと言を洁所に香深の法衣を被て年齢八十あまりの老師おぼゝ歩を出長揖して王のうるはしに坐しまとまで伶人

一齊に絃管を催し物の音妙に調まば鶴闌入る舞姫鳳冠を戴き霞帔を裝ひて立舞光景窈窕として目を歓ばせ耳を清しむ樂はさるいち安城宮甚薩天人樂ぞありける舞樂たゝて後大王もろ人に飲食を賜りて富士太郎を指して老師に告て宣く寡人嘗一個の讐あり是を玉帝に奏え奏て立地に罰せんと思ひしが者奴いまゞ命數竭ぎ。あらうにその富士太郎は年少く弱しかども仇をおもひて志移らず母に事て純孝なりとて彼を讐を擊せ因果覿面善悪應報の理を示さんと欲をさまゞ彼は元来樂人の子なり。その父右門は武藝

も倣得ようしが。児に教ゆるに音律を先にしてのまごとき
学のるに及ざるし。師は是武の道におゐて古今肩を比
ぶる者もなけれバ。この一條をしのぎまうさん爲に駕を枉し
なり。彼が仇にあへんとき用心ともるべきるべく委細に語り
聞せのぶるべしと宣ふ。富士太郎はのとうまし〳〵おぼえて。
おそるく跪出しくバ。老師ちかく召て宣ハく小子よく聞夫
唐山に十八般の武藝あり。所謂一に弓。二に弩。三に鎗。四に
刀。五に劍。六に弟。七に盾。八に斧。九に鉞。十に戟。十一に鞭。
十二に簡。十三に槁。十四に叉。十五に叉。十六に把頭。十七に
綿繩（クサリカマヤウノモノ）。十八に白打。これなり。又本朝の武藝ハ弓馬

剣法。鎗棒。拳法。水戯の七種にして。彼十八般もこの中に
こもるべし。又劍法に活人劍。殺人刀。向上極意妙劍。十字。手
裏劍ホの法あり。但し劍ハ一人に敵するのみにあらず。身を護る
の寶とす。蓋射ハ六藝の一にして。百千の敵を防ぐべ
きを稱して。武士を弓とのみ。きゝ〻西夫の勇に誇て
謀拙く機に臨み變に應ずるものハ。縱養虫
弓を握りのち。項籍が劍を服とも。終に勝利なるべくぐ。
この故に兵法ハ形を則とし。心を師とす。すべて形ハ心より成
るものなれバ。太刀ぬくまぐを待ざるも。一心定るとき。
金石の堅きを碎得るものぞ。譬バ汝が抱を以て大鼓を拍が

どとゝ。徒に力を用ゆるとも心定り形整ぬハ。音律いろゝその調に稱ふべき。こゝろの理を推て覺悟せしと宣へ。富士太郎ふく〳〵感激し。闇を出て明きに著くが如くなるべし。おゞへ膝をさくめて。いろ〳〵。傳うけしなり。昔鎌倉創業のとき。武藝の古實どもおのく失ひつるを。頼朝卿しきく西行法師に問諦めて絶ぬるをつぎ廢ぬるを興し。その後百余年に元弘の乱きたり。只人を斬を武士の所行とおゞへ。こゝて古實をあるあるし。言の序に問まゐらせゝば。常に人のいふとゝぶ。物具と八甲冑の異名ゆゑ又冑ハ

まさ強弓に三人張の稱あり。とゝらハいろふとゝろえはべくやと問に。老師ゝさへて。おゝよそ大將の六具あり十三の六具あり。旌。箙。團扇。鞭。鞐。毛沓。大將の六具多。又臑當。脛楯。胴。籠手。首鎧。頬當。士卒の六具まさ大六具ハ縅。箙。小旗。鞭。鞐。扇。とゝ。ゝり。ゝゝを。て物具と稱を世俗物具を甲冑のゝとゝるハ違へり。まさ鎧ふゝとゝいとゝのゝの別ふあるふあらを兜も盛をゝゝ冑のゝとゝり。まさ秘金形ハ秘金の美ふあるを。ゝるゝゝ火形ゝり。ゝゝ龍頭の火焔を表して。敵に陽氣を示をゝり。後の人火を鍬と讀て。附會の説を

森羅殿の
富士太郎
武藝の
古實を
聞

まとのごとく弓の三人張の名あるをば強弓のゆみ
らぼ。引ハさべて三人をて張を禮とも。弦うけ一人張ゆ
一人。押ゆの一人。以上三人をもて貴人の弓杯を
一人をて張ハ大ゆ無禮ゆ。まと弓の強弱を別てハ
何石の弓といべ。まず弓の力を量るゆハその弭ゆ索を
著て。是を梁などゆ釣おき。本末ゆ米俵をうけて試をゆ
弓の強きゆと重くゆるゆをば。あるひハ三石あるひハ五石を
ゆ。後世ことを誤りて。三人張とゆバ強弓のことくもる
みやゆらんと説示しゆるゆ。富士太郎りゆ感嘆しゆか
笠懸流鏑馬。牛追物など。引馬の古實ことごとく問

諦めまゆらるゆ。早晩鷄明暁を告るゆぞ。大王左右ゆ
命て。彼ゆ物ことせよと宣べ。有司錦の嚢物を持りて
ゆゆ。富士太郎ことを賜りて。王と老師とを拜し終ゆ退出を
るとき。老師まさ告て宜く汝今より後両度の危難ゆ。
只欲生則死欲死則生よくらの二句をつまれをと命をれば。
富士太郎謹て旨を稟。夫婦揖を下るをおりバ夜いゆ
ぞゆと明るゆ。大度高樓忽然と跡をくりて合法衢術の
閻魔堂きのゆ棟上して。萱簷たちゆる菩ゆけうける裡ゆ
忙然としてつゆ居しゆ。ゆいくゆと疑ひまどひ。眼を定て
見ゆべ。石の閻王曩ゆ火ゆ焼ゆるゆとゆくも。缺損ぞる

ゑるうしを此度まさ彩色を施して倚子の上ゑ安置せうこゑ於て富士太郎。俄然として大ぢめて暁得櫻子ゑいろけるゑ。この閻羅王往古より灵験掲焉しをのひりて傳なるゑ果して違わぞ。曩昔見えゑりる大王ハこの閻君ゑそ。森羅殿新ゑ成就せしを聞えしハこの堂のうるべ。ゑるゑ大王告言して。こまゑ雙人あり。者奴を富士太郎ゑ撃せて。因果覿面の理を示さんと宜ひしハ浅間照行ゑ支えるん。照行往ゑこゑ父を撃んとそこの堂を焼しゑば。雙人と宣ひけゑ又彼兵法を説示しゑる老師ハ多田の灵廟満仲朝臣の神霊ゑ。あいねゑ是のゑる年。多田の

神社へ詣しゑ尊像ハ馬上甲冑の打扮ゑ在せども。彼老師の相貌よく肖ゑる。今按ずるゑ貞元二年八月十五日。満仲朝臣祝髪して。新發意満慶と謂しゑ舊記ゑ見えゑる。まゑ彼神霊僧形を現ドゑ。据ゑるゑあらぞ。さるゑそも閻王のこまゑ驚しゑ物ハ。何ゑりけんとおひても。衣服の間をゑへ探まゑ是夢ゑ歟ゑ現ゑ歟ゑ奇ゑくて。忙しく打ゑ見ゑゑ父と共ゑ焼亡ゑんと思ひつる。笙の秘書ゑそ。わしゑ冬且歓び且驚きて夫婦齊しく合掌し。俯ゑ拜ゑ仰ゑ尊ゑ。感涙ゑぬうねゑりる且して富士太郎まさゑ。ゑ豫て父の忌ゑ果ゑば。首途と

雖人を索んと思ひしかども今〳〵神佛の冥助ふかく少しも猶豫べきかはいぶ。いぎ立くうて母はゆもこの光景を語まゐらせてんとのくまに櫻子もいよ〳〵勇みとちて母君〳〵とも呼召さねバ晝夜心を苦しめひけんとく帰りの人〳〵いそがしく夫婦閻魔堂を走り出り。遥かに多田の方に向ひて天廟を拜し。訖り。遂に浅沢を望て走去けり。

三国一夜物語巻之四了